活動報告

総務部

2014年度の取り組みと2015年度事業紹介

当財団の将来ビジョン「22ビジョン（2013～2021年度）」の第1フェイズ「第一次中期経営計画（2013～2015年度）」のもと、「実践的な学術研究機関としての基盤づくり」を掲げ、現在私たちは各種事業に取り組んでいます。

2014年度（平成26年度）は、これまでの蓄積をベースに、新しい試みに意欲的に取り組んだ年度となりました。

2015年度（平成27年度）は、第一次中期経営計画の最終年度として、目標の着実な達成に向け、これまでの取り組みを継続しつつ内容を充実させながら各種事業に取り組むとともに、新たなステージに向けたより具体的な環境構築に取り組む年度となります。

2014年度の取り組みと2015年度事業について、主な事業を中心にご紹介いたします。

実践的な学術研究活動の推進

2014年度

国内外の研究者や地域などと協働した研究活動を充実させ、積極的に学術論文として発表するとともに、機関誌『観光文化』や当財団ホームページなどを通じて研究活動を発表しました。

具体的には、国や地域の観光政策に関する研究として、「インバウンド政策（訪日外国人）に関する研究」をはじめ、「都道府県の観光政策に関する研究（観光政策研究会）」「これからの観光地づくりと観光計画に関する研究」「観光の経済効果を高めるための政策研究」「自然公園の望ましい利用に関する研究（自然公園研究会）」「観光指標を活用した持続可能な観光地づくりに関する研究」「自然保護地域の評価・計画・管理・合意形成手法に関する研究」などに取り組みました。

また、地域特性やテーマに基づく研究として、3カ年度目となる「東北の観光復興に関する研究」、全国7つの著名な温泉地が参加する「温泉地におけるまちづくりに関する研究（温泉まちづくり研究会）」をはじめ、「観光地マネジメント研究会」「観光に関する住民意識に関する研究」「歴史文化観光とその振興施策に関する基礎的研究」「観光地における旅行流通に関する研究」「旅行業に関する研究」「観光資源評価に関する研究」などに取り組みました。

また、研究員の専門性の強化として設けた「博士号取得支援制度」を通じ、1人の研究員が博士号を取得しました。

さらに、国際的な研究活動としては、「韓国文化観光研究院（KCTI）」との3期目となる研究協力に関する覚書（MOU）を締結するとともに、「日韓国際観光カンファレンス2014」を日本で開催しました。

2015年度

2014年度に取り組んだ主な研究を継続しながら、新たに「ユニバーサルツーリズムの推進に関する研究」「アジアの観光研究の現状に関する研究」「まち歩き観光に関する研究」といった研究テーマに取り組みます。

国際的にも「インバウンドに関する研究」「アジア地域旅行者調査」「アジアの観光研究の現状に関する研究」などを通じて、海外での観光研究発表や観光研究者とのネットワークづくりを積極的に行います。

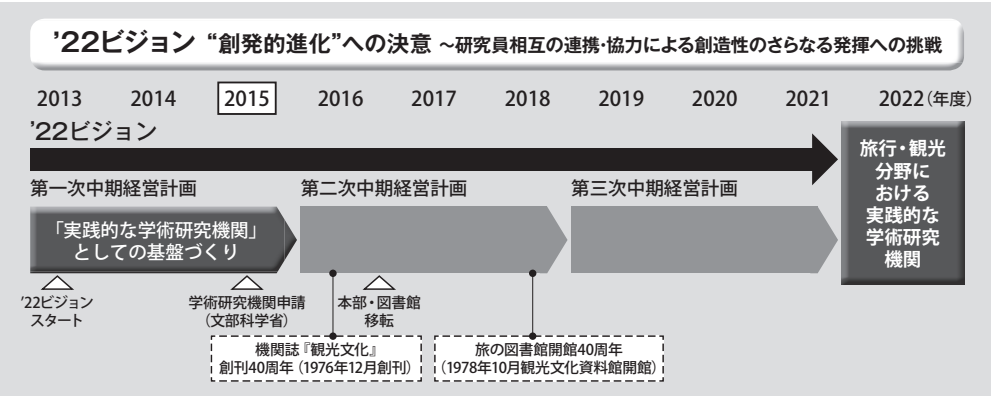
旅行市場および観光政策に関する独自調査の実施と『旅行年報』「旅行動向シンポジウム」での発信

2014年度

これまで実施してきた各種調査（旅行者動向調査・海外旅行市場調

査など）を整理統合し、より精度の高い分析を目指し、新たに旅行市場および観光政策に関する4つの独自調査をスタートしました。

図　'22ビジョンのスケジュール



- **「JTBF旅行実態調査」**
（直近1年間に実施した旅行について調査。年1回実施）
- **「JTBF旅行需要調査」**
（回数や意向など旅行に関する意識を調査。月1回実施）
- **「5か国・地域旅行者調査」**
（中国、韓国、タイ、インドネシア、台湾などを対象とする訪日外国人市場における来日意向などを調査。年1回実施）
- **「観光政策に関する調査」**
（都道府県・政令指定都市に対する観光政策アンケート調査。年1回実施）

さらに、4つの独自調査結果の公開の場として大幅に内容を改編した『旅行年報2014』の発刊（ホームページ上で無料公開）、「第24回旅行動向シンポジウム」の開催を行いました。

2015年度

新たにスタートした4つの独自調査について、調査・分析の内容の充実、改善に取り組みます。

また、『旅行年報』「旅行動向シンポジウム」は、引き続き4つの独自調査結果の公開の場として位置づけ、内容をさらに充実させます。

同時に、当財団の主催するセミナー（「観光地経営講座」）やホームページ、メールマガジン、プレスリリースなどによって、4つの独自調査の内容を広く社会に発信します。

自主研究との相乗効果が発揮される受託調査事業の実施

2014年度

調査研究活動を通じて得た知見を観光振興に結びつけるべく、政府機関や地方自治体からの調査を受託しました。具体的には、インバウンド、観光人材育成、観光地の評価といった観光庁調査をはじめ、東北地方や屋久島などのエコツーリズム推進に関する環境省調査、観光経済波及効果や展示会産業に関する経済産業省調査などに取り組みました。また、観光振興に取り組む地域の観光戦略やアクションプランの策定、産業振興やバリアフリー、世界遺産地域を含めた持続可能な観光のあり方などについて、山梨県、沖縄県をはじめ、川越市、富士河口湖町、鳥羽市、由布市、白馬村、白神山地などの地方自治体・公的機関からの調査に取り組みました。

2015年度

引き続き、実践的な調査研究機関として、観光庁をはじめとする政府機関や地方自治体からの、公益性の高い調査研究事業に積極的に取り組みます。特に、自主研究との関連性が深く、相乗効果が発揮される観光政策の立案や、インバウンド関連の調査、東北地方をはじめとする地域の観光復興・振興に資する調査などに取り組み、当財団の調査研究の成果を活かしながら、観光振興に寄与します。

機関誌『観光文化』、ホームページなどを活用した研究成果の情報発信

2014年度

機関誌『観光文化』では、特集として「国際的な視野から見た観光研究」「観光資源評価研究『美しき日本　旅の風光』」「温泉地における不易流行を考える」「地域発観光プログラムの流通・販売」といったテ

ーマについて、外部研究者や地域などの実践者の方々にご協力をいただきながら、財団の論考・提言として取りまとめて発刊しました。同時に当財団のホームページで無料公開し、広く社会に発信しました。

当財団のホームページでは、研究レポートやコラムなどを通じて、研究員自らが現在の研究活動の紹介や所感などを積極的に発信しました。

2015年度

引き続き、研究員自らが現在の研究活動などを機関誌『観光文化』や当財団のホームページなどを通じて積極的に発信します。

特に、機関誌『観光文化』は、当財団の「専門委員」をはじめとして観光文化への深い知見と当財団活動をご理解いただく専門家の皆様にご協力をいただきながら、一層の内容充実を図ります。

「日本交通公社ビル」における「創発の拠点」づくり

2014年度

本部および「旅の図書館」の賃貸契約終了を迎えるにあたって、本部および「旅の図書館」のこれからのあり方について、検討してまいりましたが、長期的な財団運営の視点から、本部および「旅の図書館」の機能を一体化した新しいビル「日本交通公社ビル」の建設を決断し、東京・南青山に用地を購入しました。

2015年度

2015年度においては「日本交通公社ビル（2016年夏頃竣工予定）」の具体的な環境を構築してまいります。特に、実践的な調査研究機関として研究員が意欲的に調査研究に取り組む場、国内外の観光研究者・実践者が集い交流する研究の場、ネットワークづくりの場、観光研究資料の収集・公開の場といった「創発の拠点」の構築を目指します。

（企画課長　中野文彦）

旅の図書館

第2回「たびとしょCafé」を開催

「旅の図書館」では、去る3月6日（金）17時半より、第2回「たびとしょCafé」（以下、Café）を開催しました。

今回は「〝アニメ聖地巡礼〟から考える観光と地域の可能性」をテーマに取り上げ、この分野の研究の第一人者の一人である奈良県立大学地域創造学部講師（2015年4月より准教授）の岡本健氏をゲストスピーカーにお招きしました。

ゲスト（参加者）は23人。年度末の時期でありながら、大学教員や研究者、観光実務者、観光政策や行政に関わる方をはじめ、アニメを研究テーマとする学生やコンテンツ産業に関わる方など、幅広い年代・業種の方々にお集まりいただき、「アニメと観光」や「コンテンツツーリズム」への関心の高さがうかがえました。当財団からも数人が参加しました。

第1部：ゲストスピーカーによる話題提供

ゲストスピーカーの岡本氏から、「〝アニメ聖地巡礼〟から考える観光と地域の可能性―つながりを創り出すコンテンツツーリズム」と題して、ご自身が「アニメ聖地巡礼」研究に至った経緯や巡礼者の行動、聖地となった地での動きなどについて、スライドを使ってご紹介いただき、「アニメ聖地巡礼」という観光現象の実態や特性を理解することができました。

【第1部のお話のポイント】

◎「アニメ聖地巡礼」とは、「アニメの背景となった場所を見つけ出し、そこを訪ねる行為」で、インターネット環境の向上を背景に1990年代に誕生、発展。10代～40代の男性が中心。

◎何の変哲もない景観がアニメの舞台となったことで、ある人には「聖地」に変貌する。

◎巡礼の現場で起きていること：写真撮影や動画撮影、アニメ聖地巡礼ノート、痛絵馬、グッズを残していく、黒板アート、痛車、地元との交流。

◎地域がファンに応えるかたちで、ファンとの交流や新たな文化が生まれている。

写真1 何の変哲もない景観がアニメの舞台となり、「聖地」になる

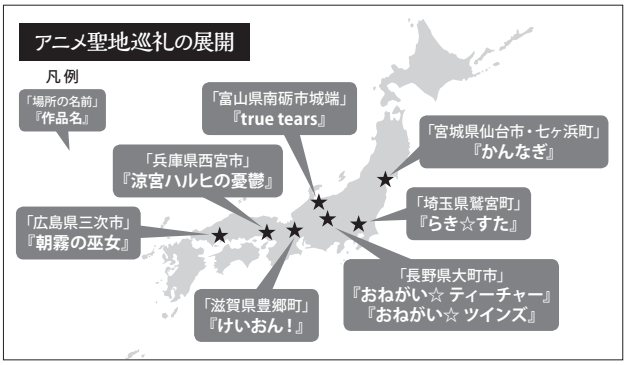


図1 主なアニメ聖地

写真3 ファンが掛けていく痛絵馬（鷲宮町・鷲宮神社絵馬掛所）

写真2 手作りの神輿で地元の祭りにファンも参加（鷲宮町・土師祭）

（写真1～3は、岡本健氏提供。図1は岡本健氏提供の図を基に作成）

第2部：ゲストスピーカーを囲んで（意見交換）

ドリンクや軽食を取りながら、ゲストスピーカーとゲストとで意見交換をしていただきましたが、和やかな雰囲気に話は尽きませんでした。以下にその一部を紹介します。

◎地域における「アニメ聖地観光」の仕掛け方とは？

【参加者（大学教員）】「アニメ聖地観光」は、能動的に仕掛けてうまくいくものなのか。

「アニメ聖地観光」の事例を見ると、巡礼者が自発的に発見するところからスタートしており、そこには偶発的なものがあるように感じる。計画的に仕掛けることは、一番肝心な、最初の巡礼者の自発的な発見の芽を摘んでしまうことにならないか？

【岡本氏】アニメ、アイドル、ご当地キャラなどは、ある部分では勝手に育っていくのを待たなければならないタイミングがあると思う。「アニメ聖地巡礼」の例では、まずファンがアニメ作品の舞台となった場所を見つけ出し、その場所に関するウェブサイトを作っていく時期があり、このタイミングでは、あまり勝手に作り込んではいけないところがある。その後、自治体の担当者がやる気があるファンに対して〝一緒にやりませんか〟と声をかけて、「アニメ聖地巡礼」のマップを作ったり、ファンからの意見を聞く会を開催したりすることから、少しずつ、地域がするべきこと、ファンの人たちが自分たちで楽しみながらやることなど、相互の関わり方が見えてくるのではないか。

岡本 健（おかもと たけし）氏
奈良県立大学 地域創造学部 講師（2015年4月より准教授）。1983年奈良市生まれ。専門は、観光社会学、コンテンツツーリズム学、ゾンビ学。北海道大学大学院 国際広報メディア・観光学院 観光創造専攻博士後期課程修了。博士（観光学）。著書に、『n次創作観光―アニメ聖地巡礼／コンテンツツーリズム／観光社会学の可能性』（北海道冒険芸術出版）や『神社巡礼―マンガ・アニメで人気の「聖地」をめぐる』（エクスナレッジ）などがある。

【参加者（コンテンツ産業従事者）】大洗町で〝ガールズ&パンツァー〟というアニメ作品を流行らせる仕掛けにはじめから関わっている。これは昨年最も成功した「アニメ聖地巡礼」。はじめから仕掛けることが悪いのではなく、ポイントは〝地元の本気度〟。大洗町では、全商店街の方々に〝ガールズ&パンツァー〟のビデオを見てもらい、冊子を作り、商店街の方々にアニメ作品の登場人物の名前を覚えていただいた。もてなす地域の人たちがアニメ作品を実際に見て、自分の孫のようにアニメの登場人物を紹介できるようになったことでうまくいった。オタクには、現地に行って、地元のおじちゃんやおばちゃんと好きなアニメ作品について語れることが何よりも楽しい。オタク心が分かる人が関わることも重要だと思う。

◎自治体が「アニメ聖地巡礼」に取り組む意義は？

【参加者（自治体職員）】自治体の立場からは、少数のコアなファン層を誘客することしかできない「アニメ聖地巡礼」に対して税金を投入することが難しい。未知数の多い「アニメ聖地巡礼」に、あえて自治体が力を入れる意義はどこにあるか？

【岡本氏】最初はコアなアニメファンが地域を訪れるが、マスメディアに取り上げられるようになると、徐々に地域の取り組み自体が有名になり、アニメファン以外の方が多数訪れるようになる。「アニメ聖地巡礼」は、最初のきっかけづくりという意味で考えるとよいのではないか。

第2部 和やかな雰囲気の中での歓談風景

「たびとしょCafé」を終えて

「Café」は予定時間をオーバーして20時に閉店となりました。ゲストの皆様からは、「もっと長くてもよかったのでは」「話がとても面白く、あっという間の2時間半だった」といった嬉しい感想をいただきました。内容についても、「卒業論文、授業に役立つ内容で新しい発見も多く、たくさん学べた」「新たな観光の可能性を教えてもらった」「コンテンツツーリズムについて、新たな視点がもてた」「企業・行政・研究者など多くの角度の方からの意見が聞けて勉強になった」などのコメントをいただきました。

「アニメ聖地巡礼」がファンと地域との関わり合いから新たな価値を創造しているように、この「Café」も、年代・業種の垣根を越えた自由な交流から、テーマの深掘りや気づき、そしてゲスト同士の新たなネットワークづくりにつながればと思います。本年度も継続して開催していく予定です。ご期待ください。

（旅の図書館　大隅一志）